

段階を踏みながら 生徒を自発的な学びに向かわせる

上越教育大教授 中山勸次郎

言われたことには取り組むが、自ら課題を見つけて動く生徒が少ないと聞く。そのような中で、教師は生徒を自発的な学びへと向かわせるために、どのような働き掛けをしていけばよいのだろうか。学習への動機づけ論を研究テーマとする上越教育大の中山勸次郎教授に話を聞いた。

多様な段階の生徒が 同じ学年の中に存在している

先生方にとって「教師の側から働き掛けなくとも、主体的に学ぶ生徒」を育てることは、究極の目標だと思います。内発的動機づけ（自ら物事に取り組む意欲のこと）理論の第一人者であるエドワード・L・デシ氏は、人が学びに対する主体性を獲得するまでの段階を図のように整理しています。

まず、行動が生起しない段階（無意欲・無関心）から、先生に言われるから仕方なく学習したり（外的調整）、義務感や先生の期待に応えるために学習するようになります（取り入れ調整）。やがて学びの重要性や必要性

を自分でも認識しはじめ（同一化調整）、更には学びに関して自分なりの価値観を形成して（統合化調整）学習に取り組むようになります。最終的には自ら学ぶことに喜びを感じて主体的に学びに向かうようになる（内発的動機づけ）というのがデシの理論です。

このデシの理論を意識しながら生徒の様子を見てみると、同じ学年でも、外的調整段階にとどまっている生徒や、同一化調整段階に達している生徒など、さまざまな段階の生徒がいることに気付くはず。教師の役割は、個々の生徒がどの段階にいるかをつかみ、生徒が次の段階にスムーズに移行できるように、働き掛けをすることにあるといえます。生徒の成長段階を一律に捉えるのではなく、

なかやま・かんじろう◎筑波大学院博士課程心理学研究科単位修得退学。専攻は学習心理学（動機づけ論）。児童の学習への動機づけに対する社会的文脈の影響性が研究テーマ。著書に『児童の動機づけ志向性と社会的場面における達成行動』（風間書房）など。



個別に対応することが大切です。

多様な段階の生徒がいる中で、先生方の一番の悩みは、そもそも学習に参加しようとし

生徒の心に火をつける



* Ryan,1995,Ryan&Deci,2000 を基に中山教授が改変

ない生徒（無意欲・無関心の段階）の存在でしょう。彼らは「言われたから仕方なく勉強する」ことさえしようとしません。

私は彼らが学びに無意欲である理由の1つに、「経験と自信の不足」があると考えています。学習に対して意欲的な態度を示す生徒は、過去に失敗や挫折をしたことがあっても、それを乗り越えた経験を持っています。ですから、少々高いハードルを課されても、「きつ」とまた自分は乗り越えられるはずだ」という

自信を持って学びに取り組むことが出来ま

す。ところが、課題を乗り越えた経験がない生徒は、自分の能力より高い課題を前にした時には不安しかありません。だから、彼らは学びから逃げようとするのです。

鍵を握るのは、彼らに自信と経験を積ませることだと思います。その時には「まだ出ていないこと」ではなく、「頑張れば今の力でも出来ること」を目標に据えるのが大切です。例えば、30分間集中して授業を受けるのが精一杯の生徒なら、「30分間集中すること」を目標に設定する。そして、頑張って成功できた体験を積み重ねると同時に、どんな行動が有効だったのかをしっかりと意識させることで、学びへの拒否反応を軽減し、徐々に学習に参加する態勢を整えていくのです。

学ぶことの意義や面白さを生徒たちに伝えられるか

多くの生徒は、外的調整や取り入れ調整の段階にあり、教師から言われないと学習しようとしれないのが現状だと思います。そうした中でも、工夫次第で生徒の自発性を引き出していくことは可能だと思います。

例えば、国語の授業で、漢字の小テストをポイント制にした先生がいます。テストの点数だけでなく、準備学習や出来なかった漢字を復習した時間もポイントとして加算し、テストの点数が低かった場合でもしっかりと復

習をすれば100点を取った場合と同じポイントを与える仕組みにしました。

「ポイント制で刺激を与えることで生徒を学習に向かわせる」といった方法は、一般には刺激を与えるのを止めてしまうと同時に生徒はやる気を失うので、学習が継続しないといわれています。しかし、この先生は、準備学習と復習に高い配点ポイントを設定することで、「学習はテストの結果が良ければそれでいいのではなく、準備学習と見直しが大事なんだよ」というメッセージをポイント制の中に込めようとしていました。メッセージを受けた生徒の中には、学習で何が大切なのかを体得し、学びに対する姿勢が変わる生徒が出てくるのが期待できます。

「義務感や周囲の期待に応えたい」という意識の生徒をもう一段上の段階に引っ張り上げていくには、先生がその教科を学ぶことの意義や面白さを、どのように生徒に伝えていくかも重要になります。中学校では学ぶ内容の抽象度が高まるため、生徒は「こんな学習をして、いったい何の意味があるのだろうか」という疑問を抱きがちです。そうした生徒の疑問に対して、「これを学ぶと、生活のこんな場面に役立つんだ」「モノの見方がこう広がるよ」などと、生徒に向けて説得力のある言葉で語ることで、教師にそれが出来るかどうか、生徒を自発的な学びに向かわせるために非常に重要なことだと思います。